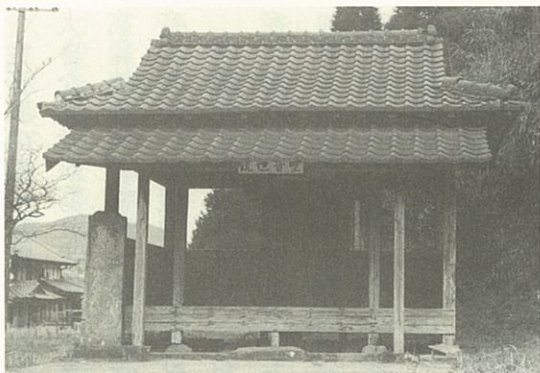




ひとつぶさん 宿分の観音堂

宿分は、元西念寺が建っていた付近を「寺の谷」といわれ、そこには、藩政時代の栗の木谷古窯跡（現 南谷）や鞍ヶ壺古窯跡（現 上高尾）があり、茶碗や壺や徳利など高麗焼が出土しました。このことから、これらの窯場で働いていた高麗人陶工が祭っていた観音さまと言われていることが領けます。

観音堂境内には、「ひとつぶさん」という板碑があります。「居士」や「釈尼」などの刻字がありますので夫婦の墓碑と思われるのですが事の由来は分かりません。昔は弁財天の辻にあったそうです。

『当観音様は今から幾世代の昔高麗人がお祭り申し上げた古跡であり世の移り変わりと共に今までのお堂はその間古材にて改築されそれも藁葺き平屋建ての老朽なお堂であったが昭和三十一年九月九日の台風にて倒壊御仏体は仮堂にお祭り申し上げこのまま何時までも放置は観音様の御尊像を無にするので中通組及び橋本組の両組長の発起で御堂改築となり八月十七日の御宣日をさし起工されあらゆるたくみ人の物心両面からの協力で昭和三十二年十月完成御仏体を新堂に御安置申し幾世久しく区民の守り世の守に観音様の御威徳を永遠にしのび御祭祀申し上げる次第である』

落成 昭和三十二年十月
建設世話人 小川節次 久保田善次郎 小川弥七 藤瀬 賢

梅岩の観音菩薩 字岩野に観音堂があります。堂

奥の祭壇に高さ約三四センチの観音菩薩の石像が祭つてあります。硬い石材とお堂内に安置されていたことあつて、享保年間から長い年月を経ているのに風化損耗が少なく彫刻がはっきり残っています。

観音像は、宝髻を高く結った髪型で阿弥陀如来の化仏をつけていて、ふつくらとしたお顔の額に白毫がついています。両手で蓮台（往生者の魂を救いとして載せる）を持った観音座像です。

像の背面に「享保六丑天二月十八日施主山口新八（一七二二年）と紀年銘があつて二八〇年ほど前に造像されたものです。

観音堂もかなり古く築造後年月が経っています。江戸時代の中期より、先祖の人々が、この観音さまにお参りしてきた、深い信仰がうかがわれます。（棒線部分削除）

宿分の観音堂 宿分の橋本より寺谷への道をしばらく行くと観音堂があります。そこには、金箔張りの聖観音の立像が須弥壇に祭られています。木彫造りのか乾漆造りかと思われる立派な仏像です。

お堂の中に、観音堂の由来と改築の動機を、次のように書き記した扁額が掲げてあります。



岩野の観音菩薩

六、観音さんの市

(1) 祭りの由来

宿分の観音様は、お堂が寺の谷の入口に所在することや鞍霊の古窯跡、栗の木谷の窯跡等から考えて、今から幾世代の昔、ここで働いていた高麗人がお祭りを始めた古堂であると言われています。そのため、昔から祭組である中通組（七戸）橋本組（九戸）の心の支えとして、毎年八月一七日、両組の人達の協力を得て、お祭りしているものです。

(2) 祭りの準備

(イ) 清掃作業

当日は、中通組、橋本組（合計一六戸）の組員総出で、堂内外の清掃、除草、草刈り等で汗を流し、堂の内外を清める作業から始められます。

(ロ) 飾り花作り

昔から独得の花づくりが伝えられていて、材料は次のようなものです。

- ・色紙、金銀紙、障子紙など
- ・竹、やなぎの葉、その他



かざり花づくりの作業



会場のかざりつけ

- ・五枚花びらの「さくら」もようを色紙で作り、大小の二枚重ねとする。
- ・真竹を一斗位に切り、直径五ミリ位の竹ひごを割ってつくる。
- ・竹ひご一本に七枚程度の花を障子紙で巻きつけ、花と花との間にやなぎの葉っぱを取りつける。一軒に一本の割合で仲よくつくる。（全部で一六本となる）

(ハ) 観音様と会場の飾りつけ

観音様の胸かけを新しいものととりかえる。（この胸かけは、子どもの安産や成長を祈願して、希望者が寄進するようになっていた）花瓶の水をかえる。

- ・壇上に飾る花を二本作り所定の位置におく。

◎会場には、完成した花を天井下の横木に取りつけ、一晚飾る。組の提灯をつるす。

(3) 観音様まいり

◎提灯にあかりをともし、仏様を迎える。夜おそくまで四方山話に花が咲く。

◎翌朝は少々早起きして、花を取りに行く。家に持ち帰って家運を祈り、次の年まで保管する。